戦争から考える命の奇跡

相洋中学校　三年　林　莉央

昨年の二月、ロシアによるウクライナ侵攻が始まった。現地の様子や死傷者が、毎日のようにテレビや新聞のニュースで伝えられた。紛争の続いている地域ではなく、平和な日々の続いていた地域が一瞬にして戦場と化し、家族が戦闘員にならざるを得ない状況に追い込まれることに、私は強い衝撃を受けた。戦争を経験したことの無い私だが、想像するだけで怖く、絶対に起きてほしくないと思っている。

長くは続かないだろうという予想に反して戦争は続き、一年が経ったころには、亡くなった人は数えられないほどになっていた。

この「戦争」や「戦争で亡くなってしまった人々」について考えた時に、幼い頃、母から聞いた話を思い出した。

第二次世界大戦の時、私の曽祖父は中国に出兵していたこと。敵の攻撃から逃れるため首まで水に浸かり、鉄砲を濡らさないように頭の上に担ぎながら川を渡ったこと。銃弾が背中に当たったり、鼻先をかすめたりしたこと。弾道がほんの少しでもずれていたら、多分死んでしまっていたこと。その頃の私は、話の意味が理解できていなかった。

もし戦争で曽祖父が死んでしまっていたら祖母や母は生まれていない。もちろん、私や姉も生まれていなかった。そう考えると、曽祖父が生きて日本に戻ってきてくれたことは本当にすごいことなのだと思った。

母は、時折私に「生まれてきてくれてありがとう。」と言う。その言葉についても、今まであまり深く考えたことがなかった。でも、私が生まれたことは奇跡がいくつも重なったことなのだということに気がついた。命がつながるという奇跡が、今までに数えきれないほど重なって、今、私が生きている。受け継いだ命を、本当に大切にしていかなくてはならないと思う。戦争が起こると、いくつもの命がなくなってしまう。その人がいなくなってしまうことで、奇跡が途切れてしまう。生きていたら、生まれてきたかもしれない命もなくなってしまう。こんなに残酷なことは、すぐになくなってほしい。

ロシアは、なぜウクライナを攻撃したのだろうか。「南下政策」を掲げていたころのロシアには、確かに「凍らない港」が必要だったのだろう。しかし今は、砕氷船のように水面の氷を割りながら進むことのできる船もある。航空機などの交通網も整備されている。きっと、私には想像のつかない色々な思惑があるのだろう。しかし、自国の利益を得るために、たくさんの人の命を奪うとすれば、「戦争」という手段を選ぶことは絶対に間違っていると私は思う。

世界中の多くの人々が「戦争反対」の考えを持っているはずなのに、なぜ戦争がなくならないのだろうか。

様々な理由があると思う。ありがたいことに、私は今、とても恵まれた環境で暮らしている。「戦争放棄」を憲法に掲げる日本に生まれることができたことも、本当に幸せなことだと思う。しかし、もし私が生活に苦しんでいたり、差別を受けていたりする状況にいたなら、今のような穏やかな気持ちでいられただろうか。他を憎み、他をおしのけ、上に立つことを考えたのではないかと思う。国も同じで、現状を打破する手段のひとつとして「戦争」があり、その手段を選ぶ国があるから戦争がなくならないのではないだろうか。

戦争をなくすことはとても難しい。しかし、世界中の人々が、今の平和で自由な生活を維持できるよう皆が協力し合い、戦争のない世界を作り上げていくことは絶対に必要だ。ウクライナ侵攻で戦っている人々や家族、そして未来を生きる人々のためにも、一刻も早く戦争がなくなり、世界が平和になることを強く願う。そして同時に、私は、「命の奇跡」を感じ、繋がった命を大切にしながら、強く生きていきたいと心から思う。